

【資料紹介】 描かれた朝鮮通信使と御座船 — 当館蔵「国書先導船図巻」を読み解く

朴 美 姫*

目 次

- はじめに
- 1 朝鮮通信使の船行列図
- 2 1711年、正徳度の「船行列図」
- おわりに

キーワード 朝鮮通信使 行列図 船団図 船行列図 川御座船

はじめに

1607年（慶長12）から1811年（文化8）まで合計12回にわたり来訪した朝鮮通信使は、政治・経済のみならず芸術文化など様々な交流をもたらした、江戸幕府に対する公式外交使節団であった。近年、通信使並びにその一行を描いた作品が注目を浴び、加えて通信使が持ち込んだ朝鮮時代の絵画も資料的な関心を集め、研究も進められている¹⁾。特に通信使一行の姿を描いた絵画については先学の研究によって明らかにされつつあり、その中でも1711年（正徳元）に制作された行列絵巻の歴史的な背景については田代和生氏によってその全貌が明らかにされている²⁾。しかし一方で、船団の様子を描いた「船行列図」については大澤研一氏の研究³⁾によってその詳細が明らかにされつつあるものの、これまで通信使関係の船行列図は両国の善隣友好を物語る証拠として所在の確認に追われることが多く、美術史あるいは交流史といった分野からの研究はまだかなり立ち遅れているのが現状である。

本稿では通信使の研究を行う上で大変貴重な資料である船行列図について現存作品を確認するとともに、当館蔵「国書先導船図巻」（資料番号：17200001）について紹介し、同資料が1711年の様子を描いたものであると考えられていることから、同時代の船移動の様子を描いた資料を合わせて確認し、考察を試みたい。

*東京都江戸東京博物館学芸員

1 朝鮮通信使の船行列図

1711年（正徳元）の通信使は、正使・副使・従事官の3使をはじめ、画員・医員・訳官など総計500人という、最大級の規模であった。第6代将軍徳川家宣の襲職を期して日本に来聘した一行は、宮廷がある漢陽から出発し、釜山からは朝鮮の渡海船で対馬へ向い、対馬藩主の先導で壱岐を経て瀬戸内海經由の海路をたどり、大坂港に入った。この際に用いられる御座船は、各藩から提供されたもので、船を提供する大名は各回を通じてそれほど大きい変更はなく、九州、四国、瀬戸内の大名が主に担当した。また、国書や三使が乗る船については、紀州藩などから献上されたともいわれ、小船はその都度大坂で調達されたものと考えられる。当然ながら船には各藩の家紋がそれぞれ施され、描かれた家紋を頼りに制作年や描かれた船行列図の内容を把握することができる。

現在、筆者が確認した通信使に関わる船行列図は凡そ30件である【表1】。船行列図は朝鮮側の6艘の大船のほか、対馬藩、福岡藩、西国各藩の護衛船、曳航船、沿岸警備の関船、浅瀬の漂識船など多数の船を含めて釜山から大坂、さらにそこから京都・淀までの船移動の様子を記録的に描いたもので、玄海灘や瀬戸内海を航行する外洋船と大坂の淀川河口から京都の淀まで遡行する川船の2種類に分けられ屏風、或いは図巻の断簡を掛軸に仕立て直したものなどが多く見られる。特に陸路の行列図が通信使（人物）を中心に描いているのに対して、船行列図は通信使よりも各藩が提供した「御座船」に注目して描いていることが認められる。船行列図の本来の目的が通信使の行列を記録するためであったとはいえ、後に多数の図巻が屏風として仕立て直されていることからわかるように、御座船そのものが注目を集め、楽しまれていたと推測される。このことは、陸路の行列図とは異なり、記録画の様相を取り入れながら鑑賞を目的とした美術的な価値を求められた結果であると考えられる。

2 1711年、正徳度の「船行列図」

まず、正徳度に用いられた川御座船について「大坂御馳走川御座船」並びに「諸大名川船」を『通航一覧』で確認すると、川御座船の船団はおおむね次のような構成になっている【表2】。

先頭は対馬藩主・宗家を乗せた船で、本資料には記されていないが、陸路の行列図からもわかるように、先頭は通信使の巡視旗・清道旗・形名旗など、行列の際に用いる道具を運ぶ上荷船、さらに楽士と楽器を乗せる百石船、対馬藩関係の鯨船、通信使一行の船が近づいていることを知らせる伊予の小早船が続いていたと考えられる。続いて本隊ともいえる通信使一行を乗せた船が登場する。まず、上官を乗せた国書先導船が2艘、続いて国書轎（国書を納めた轎）を乗せた国書船の浪速丸、正使を乗せた紀伊国丸、副使を乗せた土佐丸、従事官を乗せた中土佐丸【図1】、さらに上々官を乗せた第一船から第三船、上判事を乗せた第一船から第三船が続く。そのあと対馬藩の鯨船、輪番僧を乗せた御座船が2艘、対馬藩士を乗せた御座船が数艘続く。ここまでが船団の中心でこの他に一行の乗船に随伴する供船があった。

1719年の通信使に製述官として随行した申維翰（1681～1752）の使行録『海游録』に「倭官の前例に従って私は国書を乗せた船に乗り、正使、副使、従事官の船が後を追い、旗纛・節鉞・鼓角を乗せた小

【表1】朝鮮通信使船行列図の現存作品一覧

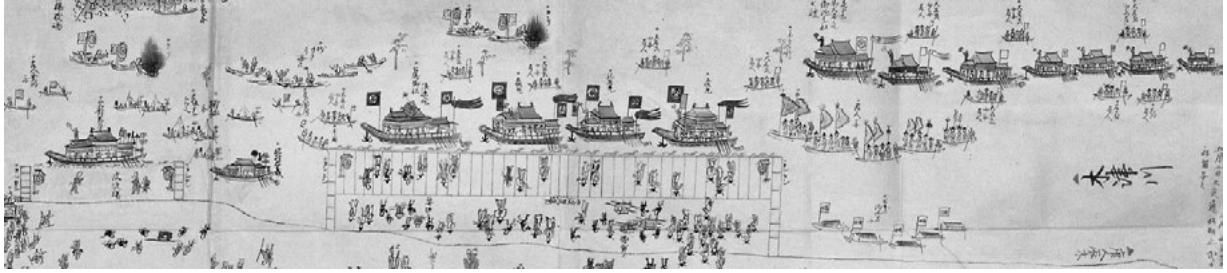
※表は各地において開催された通信使関係の展覧会図録を参考に図版の確認が取れた作品のみ反映したものである。なお、制作年については主に先行研究を参考に掲載した。

| No. | 制作年 | 作品名 | 法量（点数） | 所蔵 |
|-----|----------------------------|--------------------|---------------------|-----------------|
| 1 | 第7回1682年 (天和2年) | 船絵馬（朝鮮通信使川御座船図） | 98.0×189.0（1枚） | 大阪・美具留御魂神社 |
| 2 | | 朝鮮通信使上判事第一船図 | 27.8×84.6（1幅） | 大阪歴史博物館 |
| 3 | 第8回1711年 (正徳元年) | 朝鮮通信使国書先導船図屏風 | 154.9×351.4（6曲1双） | 個人蔵 |
| 4 | | 朝鮮通信使国書先導船図屏風 | 75.2×510.4（8曲1隻） | 大阪歴史博物館 |
| 5 | | 朝鮮通信使上々官第三船図 | 79.0×148.0（1枚） | 大阪歴史博物館 |
| 6 | | 朝鮮通信使上々官三船供船図 | 79.0×111.5（1枚） | 大阪歴史博物館 |
| 7 | | 朝鮮通信使川御座船絵巻 | 28.9×765.8（1巻） | 神戸大学海事博物館 |
| 8 | | 国書先導船図巻 | 97.0×338.0（1巻） | 江戸東京博物館 |
| 9 | | 朝鮮通信使上々官第一船図絵馬 | 85.0×147.0（1枚） | 岡山・若宮八幡宮 |
| 10 | 第8回1711年 又は 第9回1719年 | 朝鮮通信使上判事第二船図 | 84.4×343.0（1巻） | 宇和島伊達文化保存会 |
| 11 | | 朝鮮通信使上判事第二船図 | 78.5×366.5（1枚） | 船の科学館 |
| 12 | 第9回1719年 (享保4年) | 国書樓船図 | 58.5×1523.5（1巻） | 国立中央博物館（韓国） |
| 13 | | 朝鮮通信使川御座船図屏風 | 59.0×263.6（6曲4隻） | 大阪歴史博物館 |
| 14 | 第10回1748年 (寛延元年) | 朝鮮通信使上々官船図 | 59.3×173.5（1枚） | 徳島市立徳島城博物館 |
| 15 | | 朝鮮通信使上々官船供船図 | 59.3×77.1（1枚） | 徳島市立徳島城博物館 |
| 16 | | 信使来聘自兵庫至大坂引船図（2巻） | 41.4×①2533.1②2433.6 | 兵庫・桜井神社 |
| 17 | | 通信使訪淀城図 | 138.0×135.9（1枚） | 国立中央博物館（韓国） |
| 18 | | 朝鮮人大行列記（内題朝鮮人来朝物語） | 22.2×15.8（1冊） | 神戸市立博物館 |
| 19 | | 朝鮮人来朝覚備前御馳走船行列図 | 14.8×824.9（1巻） | 個人蔵 |
| 20 | 第11回1764年 (宝暦14年) | 朝鮮通信使船上関来航図 | 60.3×86.8（1枚） | 山口・超専寺 |
| 21 | | 朝鮮通信使室津湊御船備図屏風 | 138.7×149.0（2曲1隻） | 兵庫県立歴史博物館 |
| 22 | | 朝鮮人来朝一件 | | 大阪歴史博物館 |
| 23 | 第12回1811年 (文化8年) | 朝鮮人航海船之図 | 30.0×60.0（1冊） | 大阪歴史博物館 |
| 24 | 不明 | 朝鮮通信使川御座船図屏風 | 78.3×251.0（6曲1隻） | 九州国立博物館 |
| 25 | | 朝鮮通信使御樓船図屏風 | 137.3×349.8（6曲1隻） | 大阪歴史博物館 |
| 26 | | 朝鮮通信使川御座船図 | 45.1×113.2（1面） | 大阪歴史博物館 |
| 27 | | 国書樓船図 | 87.9×54.5（1幅） | 蔚山博物館（韓国） |
| 28 | | 朝鮮通信使船団図 | 147.9×79.6（1幅） | 国立海洋博物館（韓国） |
| 29 | | 朝鮮通信使船団図屏風（狩野探信） | 各94.0×318.0（6曲1双） | 個人蔵 |
| 30 | | 朝鮮通信使船団図（計8点：全て額装） | 縦58.5 | Kiplin Hall（英国） |

【表2】正徳度の通信使来日の際に用いられた船一覧

※表は『通航一覧』を基に『江戸幕藩大名家事典』、『新訂寛政重修諸家譜』、『寛政武鑑』を参考に作成し、順序は『通航一覧』の記載に従った。

| No. | 船乗員 | 船名 | 藩主 | 定紋 | 副紋 |
|-----|------------|-----------------------|----------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 | 先導 | 宗家御座船 (宗対馬守船) | 宗義方1684-1718 (対馬府中藩主宗家5代) |  |   |
| 2 | 国書 | 浪速丸 (国書船) | 幕府御座船 |  | |
| 3 | 正使 | 紀伊国丸 | 幕府御座船 |  | |
| 4 | 副使 | 土佐丸 | 幕府御座船 |  | |
| 5 | 従事官 | 中土佐丸 | 幕府御座船 |  | |
| 6 | 上々官 第一船 | 松平隠岐守船 | 松平定直1660-1720 (伊予松山藩主松平家4代) |  |  |
| 7 | 上々官 第二船 | 松平淡路守船 ※船は長府毛利家のもの | 蜂須賀綱矩1661-1730 (徳島藩主蜂須賀家5代) |  |   |
| 8 | 上々官 第三船 | 松平民部大輔船 | 毛利吉元1677-1731 (長門萩藩主毛利家5代) |  |   |
| 9 | 上官 | 松平土佐守船 ※国書先導船 | 山内豊隆1673-1720 (土佐高知藩主山内家6代) |  |  |
| 10 | 上官 | 稲葉伊予守船 ※国書先導船 | 稲葉恒通1690-1720 (豊後白杵藩主稲葉家7代) |  |  |
| 11 | 上判事 第一船 | 松平安芸守船 | 浅野吉長1681-1752 (安芸広島藩主浅野家5代) |  |   |
| 12 | 上判事 第二船 | 伊達織部船 | 伊達宗賛1665-1711 (伊予宇和島藩主伊達家3代) |  |   |
| 13 | 上判事 第三船 | 松平主殿頭船 | 松平忠雄1673-1736 (肥前島原藩主松平(深溝)家) |  |  |
| 14 | 建仁寺 集長老 | 小笠原右近将監船 | 小笠原忠雄1647-1725 (豊前小倉藩主小笠原家2代) |  |  |
| 15 | 相国寺 縁長老 | 阿部備中守船 | 阿部正邦1658-1715 (備後福山藩主阿部家初代) |  |  |



【図1】「通信使訪淀城図（朝鮮通信使淀城下到着図）」1幅 国立中央博物館（韓国）所蔵（部分図）

船は隊をつくって進んだ。軍官と訳官の船がその後を追い、次いで中官・下官と荷物なども他の船数十艘に分けて乗せた。一緒に乗ったのは康津縣監の崔必蕃、寫字官2人、小童1人、私が連れてきた金世萬、そして楽団7、8人、倭人禁徒2人、訳官1人であった。（中略）」としている⁴⁾。「前例に従って」という記録から、通信使を乗せた御座船は主にこのように構成されていたと考えられる。

ここでは【表2】を参考にしつつ、1711年第8回目の通信使の様子を描いたとされる船行列図について確認しておきたい。

(1) 「朝鮮通信使国書先導船図屏風」6曲1双 紙本着色 個人蔵（船の科学館特別展図録「御座船—豪華・絢爛大名の船」より転載）【図2】



卷子として制作したものを3段に繋げて屏風に仕立てたものである。左隻の右下には正使と副使を象徴する「形名旗」を抱えた小船と行列の先頭をつとめる「清道旗」の小船、そして船先に鬼面（辟邪）と丹青が施されている朝鮮側の使節船、「歳遣船」が描かれている。船に荷物などは確認できず、梯子も降ろされている様子から、大坂川口に到着後、幕府や各藩が用意した船に乗り換え、淀川をゆっくり遡っていく様子であると考えられる。狩野探信筆の「朝鮮通信使船団図屏風」（個人蔵）や「朝鮮通信使船団図」【図3】のように、朝鮮側の船を主題にしている作品（表1-No28、29）もあるが、本屏風のように通信使が降りた直後の様子をとらえた船行列図は現在、本図のみであり、歳遣船を捉えた絵図類も数点しか確認されておらず、当時使われていた歳遣船



【図3】「朝鮮通信使船団図」江戸時代中期 絹本着色 国立海洋博物館（韓国）所蔵

の概要を知る上で大変貴重な資料である。通信使は6艘の船で移動していたが、船の大きさについては大小あり、形については全て同じだったことが記録によって明らかにされている⁵⁾。

右隻中央の「永」の船印を掲げた船には「丸に右重鷹羽」の紋が用いられていることから、この船は備後福山藩主阿部家が用意した阿部備中守船【表2-No.15】であることが認められる。また左上の船には「四目結」と「五七桐」の紋、そして船印から対馬藩主宗義方の先導船であることが推測される。

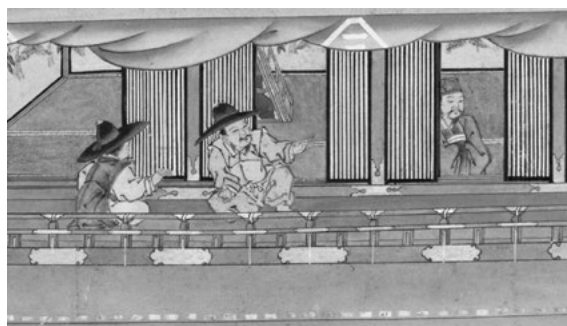
左隻の中央には「上々官第一船」と書かれた船があり、幕や旗に「丸に梅林内」【表2-No.6】と「葵紋」が描かれていることから、伊予松山藩主松平（久松）家が用意した松平隠岐守船、そしてその上の「慈」と書かれた船には「三階菱」と「五七桐」【表2-No.14】の紋が確認できることから、豊前小倉藩藩主小笠原家が提供した小笠原右近将監船を描いたものであると考えられる。

全体的に人物の描き方、特に通信使の服装が詳細に描かれ、通信使への関心の高まりがうかがえる。

(2) 「朝鮮通信使国書先導船図屏風」 8曲1隻 紙本着色 大阪歴史博物館所蔵【図4】



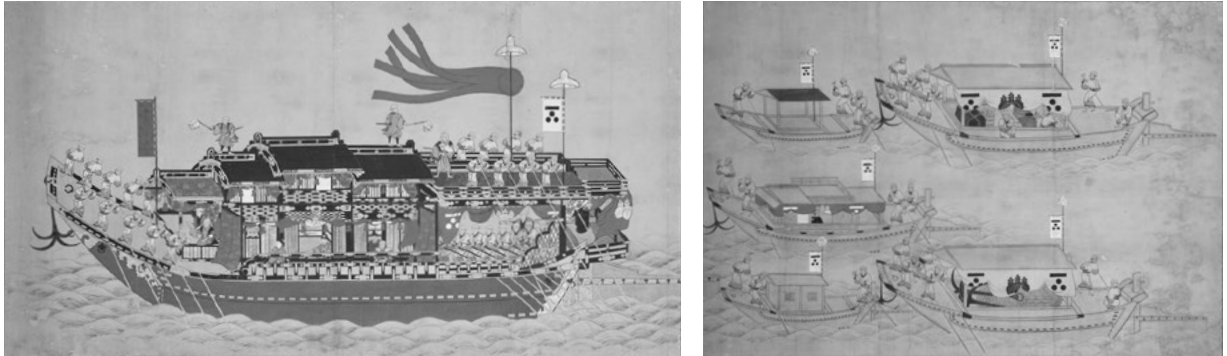
通信使一行の川御座船の中心は国書を乗せた国書船であり、本屏風はその船の前を先導する国書先導船を描いたものである。国書先導船の旗には「三」の字が角折敷の中に書かれ、棧敷にかかる幕にも同じ紋が描かれている。この紋は、豊後国臼杵藩の稲葉伊予守恒通の家紋【表2-No.10】であることから、稲葉家7代の稲葉恒通が馳走した国書先導船であることが確かめられる。船の上段の間、次の間には通信使と思われる3人が描かれ、本屏風では唯一の通信使の姿となっている【図5】。通信使の服装が陸路図に描かれる通信使の姿と類似していることから、通信使の姿は形式化され、多くは写されていたと考えられる。



【図5】 朝鮮通信使（部分図）

続く第5扇、第6扇の御座船は「丸に四目結」の紋と船尾の行列道具から対馬藩主宗義方が用意した船であることが確かめられるが、第4扇の画面下にある小船の部分が切られていることから、国書先導船と宗家の御座船の間に別の御座船が描かれていた可能性も考えられる。本屏風も【図2】と同じく卷子として制作されていたものを屏風に仕立て直したものである。

(3) 「朝鮮通信使上々官第三船図」「三船供船図」紙本着色 大阪歴史博物館所蔵【図6】



淀川を下る上々官第三船とそれに随伴する小船を描いている。現在は2面に分けて額装されているが、もとは連続した卷子として制作されたものである。沼田藩（群馬県沼田市）の藩主土岐家に伝来したものであるが、1711年に土岐家は大坂城代を務めており、通信使の接遇に関わっていたと考えられる。

船印と「一文字に三星」の紋、そしてこの船が「上々官の船」であることから、長門萩藩主毛利家が提供した御馳走船であることがわかる。『朝鮮人来朝一件』【図7】をみると吹散や船印に違いがみられるが、『通航一覧』の「惣幕紅、紋三つ星一文字五七の桐、幔幕色純子」の内容と一致していることから、1711年の様子を描いたものであることが認められる。

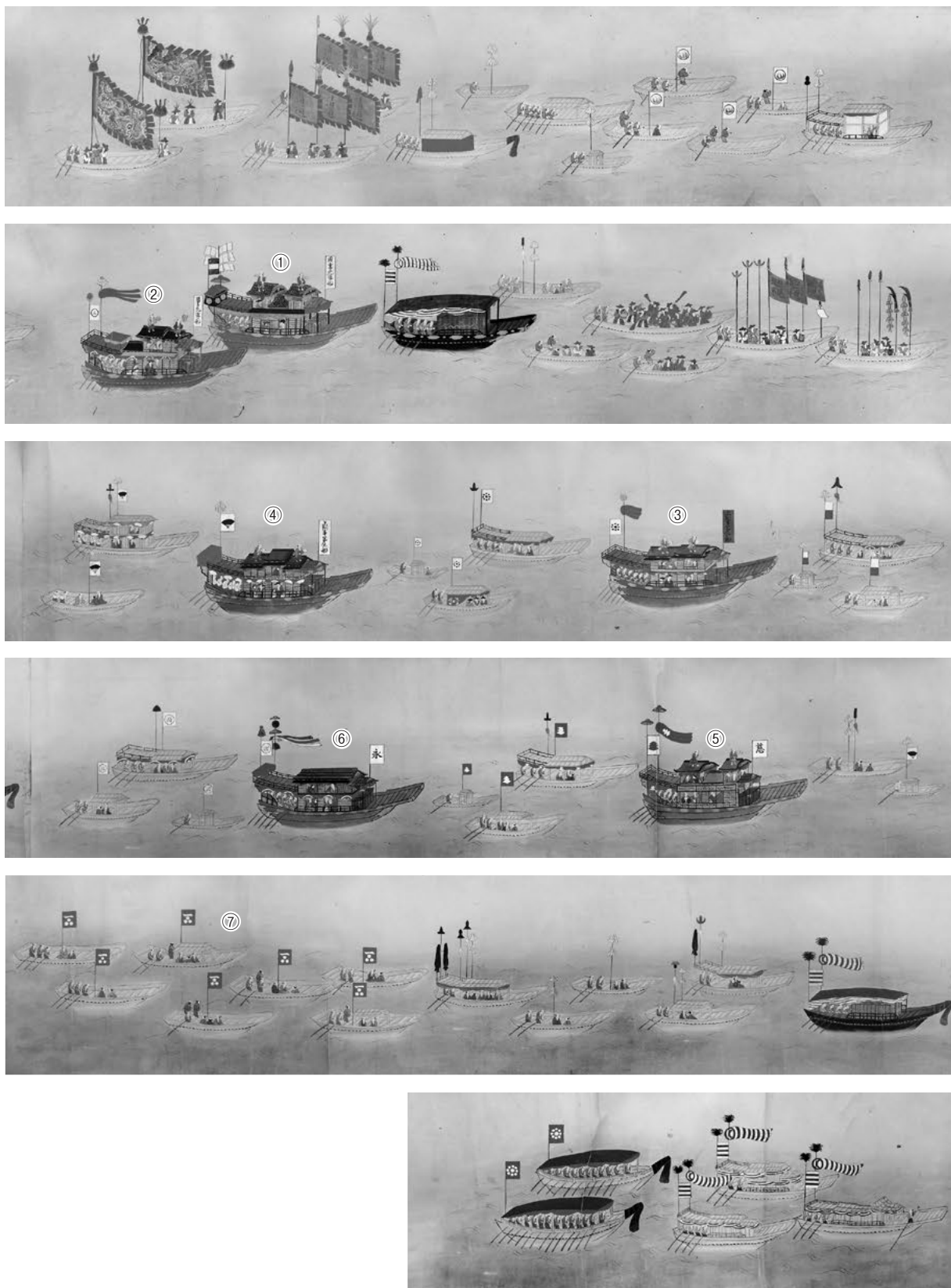
上段の間に服装から、上々官と思われる人物、そして次の間に通信使と思われる人物が2名描かれるが、服装が1711年、当時の朝鮮のものであるとは考えにくく、特に煙管を手にした男性は琉球使節の服装に類似している。

通信使の記録によると御座船について「ひかり輝き、巧をつくし、上には層楼が起ち、屋根は瓦状に木刻して緑漆を塗り、薨の下はすべて黒く、みな炯然として鏡のようだ。垂木、欄、棟はいずれも黄金をもって被い、窓楣、仰屋もまたかく如く、そこに坐臥する人の衣裾を金色に輝かせている。」⁶⁾と記している。まさに記述通りの豪華な川御座船が狩野派やその流れをくむものたちによって描かれ、川御座船による通信使の行列がいかにも多くの人々の注目を集めたかが察せられる。



【図7】
『朝鮮人来朝一件』
大阪歴史博物館所蔵（部分図）

(4) 「朝鮮通信使川御座船絵巻」 1巻 紙本着色 神戸大学海事博物館所蔵【図8】



1711年の船行列図を描いた作品の中で最も多くの御座船の確認ができる資料である。他の船行列図と比べてみると、御座船や人物などが全体的に省略化されていることから、明治時代に入ってから写されたものであると考えられている。巻頭は陸路の行列図と同じく最初に清道旗と形名旗の小船、楽団の様子もあり、御座船は次の順で描かれている。

- ①船尾の「丸に三葉柏」の紋から、土佐高知藩主山内家が提供した「国書先導船」であると考えられる。『朝鮮人来朝一件』の松平土佐守殿船の図にも船印や旗に類似する特徴が確認できる。【図9】
- ②「角折敷に三文字」の紋が施された旗と帳幕から、豊後臼杵藩主稲葉家が提供した「国書先導船」であると考えられる。
- ③「九曜紋と竹雀」紋の旗があり、伊予宇和島藩主伊達家が提供した「上判事第二船」であることがわかる。伊達家が上判事第二船を提供したのは1711年と1719年（享保4）、2回あり、同じく上判事第二船を描いたものに「朝鮮通信使上判事第二船図」（宇和島伊達文化保存会、船の科学館所蔵）【表1-No.10、11】がある。
- ④旗には「五本骨扇」の紋があり、それに続く伴船にも同じく「五本骨扇」の紋がある。1711年に「上判事第三船」を提供したのは肥前島原藩主松平（深溝）家の松平忠雄であり、家紋は「紋二重扇子」であることから絵の内容と一致しない。
- ⑤豊前小倉藩主小笠原家2代の小笠原忠雄が提供した小笠原右近将監船である。
- ⑥「丸に右重鷹羽」の紋から備後福山藩主阿部家初代の阿部正邦が提供した船であると考えられる。
- ⑦「一文字に三星」の紋の小船が続くが、御座船は確認できない。⑥番の阿部備中守船の後ろに継ぎ合わせの跡が見られることから、長門萩藩主毛利家5代の毛利吉元が提供した「上々官第三船」が描かれていた可能性も考えられる。



【図9】
『朝鮮人来朝一件』
大阪歴史博物館所蔵（部分図）

（5）「国書先導船図巻」1巻 紙本着色 当館所蔵【口絵1】

「国書先導船」と書かれた船印を掲げ、きらびやかな御座船が3艘の供船を従えて水上をゆく姿が大きく描かれる。船には「角折敷に三文字」の家紋があり、豊後臼杵藩主稲葉家の御座船であることが推測される。稲葉家は、1682年（天和2）と1711年（正徳元）の通信使来日の際に御座船を出しており、大分県臼杵市教育委員会所蔵の豊後国稲葉家伝来天和度朝鮮通信使川御座船関係文書「天和二壬戌年朝鮮人来朝之日記」によると、第7回の1682年には正使乗船を担当する旨の書付が渡されていたことが先学の研究によって明らかになっている⁷⁾。したがってこの船が国書先導船であることから判断すると本資料は正徳年の通信使の船団行列の様子を描いたものであることが確かめられる。また、『通航一覧』には「惣幕紅、紋角折敷三文字、幔幕浅黄純子」となっており、船の仕様において多くの類似性が認められる。特に（2）の「朝鮮通信使国書先導船図屏風」に描かれた稲葉家提供の船からもわかるように、船の上段の間と次の間の内部に描かれた樹木の図様が類似していることや乗船人の配置などが形式

化していることから、船行列図の写しは多数制作されていたことが推測できる。

稲葉家が提供した船の大きさは天和度の記録によると長さ12間5尺（約2333cm）、幅2間5尺（約515cm）で幕府が馳走した紀伊国丸（長さ13間余、幅3間2尺）や土佐丸（長さ12間、幅2間5尺余）、中土佐丸（長さ11間余、幅2間半余）と比べて左程変わらない大きさであったことから、この規模が川御座船の最低限の大きさとして考えられていたことがわかる⁸⁾。天和度に稲葉家が提供した御座船には小屋形船、雨戸船、雪隠船、小渡船が供船として随行していたが、本資料にも3隻の供船がそれぞれ描かれている。

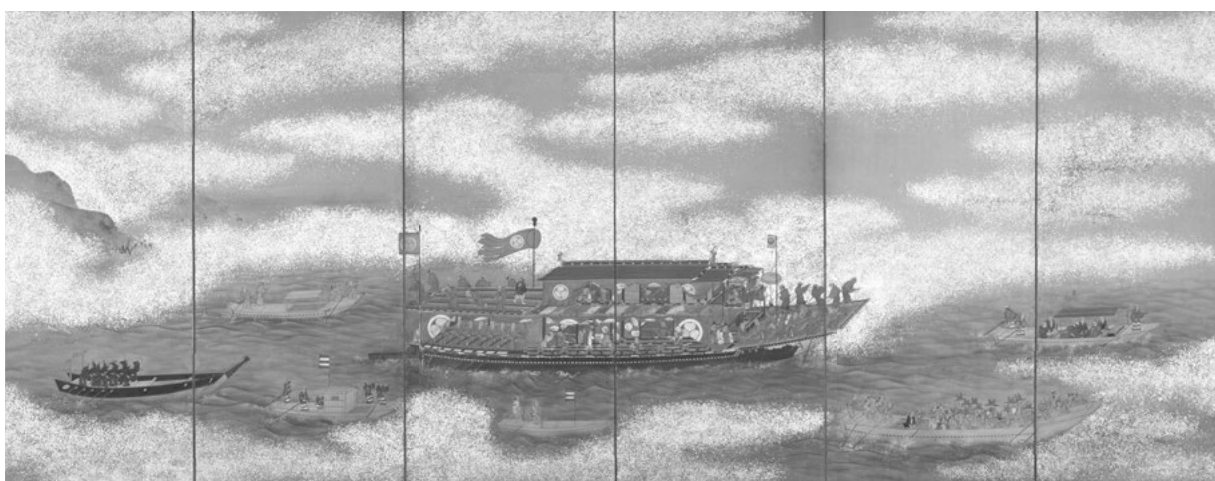
画面に通信使は描かれず、乗船人も船の大きさから考えると少なく、船を描くことを重視していることがうかがえる。

おわりに

幕府にとって朝鮮国王の書簡を持つ正式の使節を国賓としてもてなすことは、外国使節の来訪を広く示し、自らの権威を高めることであったため、この行列をできる限り多くの人々に見物させようとした。幕府から「御馳走」を命じられた大名たちは、見物人の多いところではその「御馳走」ぶりを競い、特に本稿で取り上げた大坂から淀川までの川船を「御馳走船」として提供した大名たちは、それとわかるように幔幕や毛鎗などを飾り立て、乗船員たちに揃いの着物を着せていたことがわかる。本稿で紹介した上記の資料には通信使の姿を描いていないものも多く見られ、通信使が描かれている場合もその人数は極端に少なく、形式化されていることがわかる。

本稿では現存する船行列図を全て確認することはできなかったが、御座船を主題にした通信使の行列図は通信使の様子を大きく取り入れたもの【図10】と、本稿で取り上げた上記の資料のように御座船が中心となるものと、2種類に分けることができるが、細部の検討については今後の課題にしておきたい。

近年通信使の船行列図の発見が相次いでいる。当館所蔵の「国書先導船図巻」は船行列図の一部のみ



【図10】「朝鮮通信使御楼船図屏風」6曲1双 紙本着色 大阪歴史博物館所蔵

ではあるが、御座船による行列図の全貌を考える上で貴重な資料であり、今後の研究の新たなアプローチにより、様々な情報を提供してくれるだろう。まずは本資料紹介がその一助となれば幸いである。

なお、本稿の執筆にあたり大阪歴史博物館、神戸大学海事博物館、船の科学館、神野善治様、国立中央博物館（韓国）の皆様にご協力をたまわった。心よりお礼を申し上げたい。

【註】

1) 朝鮮通信使については次の論考を参照した。

中村栄孝『日鮮関係史の研究』下、吉川弘文館、1969年。辛基秀ほか著『朝鮮通信使絵図集成』講談社、1985年。李進熙『江戸時代の朝鮮通信使』講談社、1987年。三宅英利『近世日朝関係史の研究』文献出版、1987年。辛基秀『朝鮮通信使往来』労働経済社、1993年。辛基秀、仲尾宏 責任編集『大系朝鮮通信使：善隣と友好の記録 第4巻（辛卯・正徳度）』明石書店、1993年。上田正昭編『朝鮮通信使—善隣と友好のみより』明石書店、1995年。仲尾宏著『朝鮮通信使と徳川幕府』明石書店、1997年。田中健夫『東アジア通交圏と国際認識』吉川弘文館、1997年。李元植『朝鮮通信使の研究』思文閣出版、1997年。辛基秀『朝鮮通信使一人の往来、文化の交流』明石書店、1999年。辛基秀・仲尾宏編著『図説朝鮮通信使の旅』明石書店、2000年。西村毬子『日本見聞録に見る朝鮮通信使』明石書店、2000年。

2) 田代和生「朝鮮通信使行列絵巻の研究—正徳元年（1711）の絵巻仕立てを中心に」『朝鮮学報』（通号 137）天理：朝鮮学会、1990年、1-46頁。

3) 大澤研一「豊後国稲葉家伝来天和度朝鮮通信使川御座船関係文書について」『大阪歴史博物館研究紀要』17号、2019年、1-16頁。

大澤研一「描かれた宝暦度朝鮮通信使川御座船とその運航について：館蔵「朝鮮人来朝一件」を通じて」『大阪歴史博物館研究紀要』18号、2020年、55-65頁。

4) 『海游録』上、申青泉維翰著、九月初四日癸酉（韓国古典総合DB <http://db.itkc.or.kr> 参照）

「倭官引舊事。使余乘國書船先行。三使臣以次進。旗纛節鉞鼓角。各載小舟。隊隊成列。軍官譯官又次之。中下官及行李百物。又有數十彩舫精妙者。分而屬焉。同我而入者。崔康津必蕃。寫字官二。小童一。即余所帶者金世萬 樂手七八。倭禁徒二。通事一。」

5) 東槎日記 [一] / 九月十三日丁卯（前掲註4と同じ）

「同様六船。有難卞別。乃以燈燭之柄數與籠色。放砲與火箭之放數多寡。欲卞其各船騎卞。有所新定條目。是日試之。亦皆應令矣。」

6) 『海游録』上、申青泉維翰著、九月初四日癸酉（前掲註4と同じ）

「而船之制煥爛侈巧。上起層樓。木刻蓋瓦狀綠漆。自薨以下全體黑。皆炯然可鑑。桷椽欄棟被黃金。窓楣仰屋亦如之。令人坐臥衣裾耀金色。以紫錦段爲帳。周圍四面。角角垂大紅流蘇。長可四五尺。作鳳凰尾。欄上設朱簾細如絲。其色粲粲。下不及江水尺許。船尾用五彩斑組丈餘。繫黃金鈴子二。以其聲爲轉舵緩急。船腹浸水亦範金。金波互影。」

7) 前掲3 大澤研一「豊後国稲葉家伝来天和度朝鮮通信使川御座船関係文書について」10頁。

8) 前掲3 大澤研一「豊後国稲葉家伝来天和度朝鮮通信使川御座船関係文書について」14頁。